

氏 名	王 金博
学 位 の 種 類	博士（国際日本研究）
学 位 記 番 号	博 甲 第 7517 号
学位授与年月日	平成 27 年 7 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	論説文における接続表現の「遠隔共起」についての研究 —新聞社説の「しかし」と「そこで」を中心に—

主 査	筑波大学 教授	博士(言語学)	小野 正樹
副 査	筑波大学 教授		加納 千恵子
副 査	筑波大学 准教授		木戸 光子
副 査	筑波大学 准教授		橋本 修
副 査	リュブリアナ大学文学部アジア・アフリカ研究科	教授	博士(言語学) アンドレイ・ベケシュ (Andrej Bekes)

論 文 の 要 旨

本論文は、日本語の新聞社説を対象として、談話を多重的に考察したものである。接続詞を中心とする談話構造だけではなく、文段という機能や、表現ストラテジーの分析にまで拡張し、談話を動的に捉えようとする。方法論として、語彙的関連性を見る共起（コロケーション）を、談話の単位にまで拡張し、談話展開を分析する内容となっている。

本論文は以下の構成から成る。

序章 本研究の目的と本論文の構成

第1章 先行研究と本研究の位置づけ

第2章 接続表現の「遠隔共起」の捉え方

第3章 接続表現の「遠隔共起」を認定する指標

第4章 「遠隔共起」と考えられる接続表現の組み合わせ

第5章 「しかし」と「そこで」の「遠隔共起」からみた論説文の表現ストラテジー

終章 本論文のまとめと今後の課題

序章では、本研究の目的、研究課題等を述べるとともに、論説文を分析資料とすることを示し、本論文の

全体の構成を示す。

第1章では、提唱する「遠隔共起」というアプローチが従来の語彙・文法研究の一環として扱われてきた1文中の語句の共起分析だけではなく、談話レベルまで拡大可能であることを述べる。談話研究における接続表現の「遠隔共起」に注目した理由について、1) 談話研究や日本語教育において、接続表現の「遠隔共起」現象が意識されているものの十分に解明されていないこと、2) 談話において、接続表現の「遠隔共起」は当該の談話の文脈展開パターンを客観的な言語形態的指標によって具現できるという2点を挙げている。また、談話の文脈展開パターンは、表現主体の「表現ストラテジー」を具現するものであることを述べる。

第2章では、本研究の主要な概念「談話」、「文段」、「統括」の概念を規定し、談話の「多重構造」について述べる。談話構造上の特徴は、「文段」、「接続表現の統括」、「機能領域」という3つの概念によって捉えられ、接続表現の「遠隔共起」は、この3つの概念をもとに認定するものであることを示す。

第3章では、接続表現の「遠隔共起」はどのように認定できるかについて、必要な指標について述べる。接続表現の「遠隔共起」の認定は、各接続表現の「機能領域」の認定を前提とし、「機能領域」の認定は根本的に「文段」の認定であること、その上で、接続表現の「遠隔共起」を認定するための言語形態的指標として、「A. 提題表現」、「B. 叙述表現」、「C. 指示表現」、「D. 反復表現・省略」、「E. メタ言語表現」、「F. その他」という6種を挙げる。

第4章では、コーパス言語学の手法(TスコアとMIスコア)を用いて、「遠隔共起」になり得る接続表現の組み合わせを調査する。「しかし」と順接型「そこで」、「しかし」と添加型「しかも」、「しかし」と対比型「むしろ」、「しかし」と同列型「例えば」という4種の接続表現の組み合わせは社説において体系的に使用される可能性が高く、「遠隔共起」として文脈展開がパターン化している可能性が高いことを述べる。

第5章では、前章を踏まえ、談話レベルにおいて考察する必要がある「しかし」と「そこで」の「遠隔共起」の61例を対象として、社説のマクロ構造分析とミクロ構造分析に分けて分析する。マクロ構造の分析では、社説の全体構造を観察し、特定の談話において、「しかし」と「そこで」の遠隔共起による内容のまとまりである「文段」の出現位置と機能を述べる。ミクロ構造の分析では、「しかし」と「そこで」の2つの接続表現によって、どのような意味・内容がどのような順序で提示されるのかを追究する。「遠隔共起」による文段が、社説の全体構造において、「i. 話題提示」、「ii. 詳述・例示」、「iii. 問題提起」、「iv. 意見表明-提案」、「v. 意見表明-見解」という5つの「文段の機能」を持ち、それによって、「Ⅰ. 開始のストラテジー」、「Ⅱ. 説明のストラテジー」、「Ⅲ. 提言のストラテジー」、「Ⅳ. 見解表明のストラテジー」という4種の「表現ストラテジー」として使用されること、位置については、「しかし」と「そこで」の「遠隔共起」は、社説の「開始部」「展開部」「終了部」のどの部分にも使用されているが、使用傾向に違いがあり、各ストラテジーとの関連性を記す。

こうした分析を通じて、社説の談話において、「しかし」と「そこで」の「遠隔共起」は、恣意的に使用されるものではなく、特定の伝達目的を果たすために、特定の位置で限られた言語形式によって使用されていること、つまり、特定の伝達目的を果たしていることを明らかにする。談話レベルの言語単位にもパターンが存在し、接続表現の「遠隔共起」によって社説の文脈展開パターンが客観的に解明できることを結論とする。

審 査 の 要 旨

1 批評

本論文は、新聞社説を対象に接続詞「しかし」「そこで」を例に、いかに談話が構成されているかを論ずる

ものである。従来、接続詞に注目した研究、あるいは、新聞社説のテキスト構造を分析した研究は多くなされてきたが、「遠隔共起」という新たな分析方法を提唱した、独創的な分析が最大限評価できる。そのために、新聞社説を徹底的に収集した姿勢にも高い評価を与える。この分析方法から見られることは、従来の接続詞に関わる研究では、前件と後件など接続詞を中心とした、論理構造の分析が多く見られたが、一文単位ではなく、社説全体が接続詞を中心としたストラテジーとして構成され、その分析にも「表現ストラテジー」「文段の機能」「出現の位置」といった複数の視点でテキストを分析していることは、当該分野での新たな知見である。

特に、評価できる点は以下の2点である。

[1] 文を越える談話の文脈における接続表現の「遠隔共起」について、その定義と認定方法と認定指標などについて議論し、接続表現の「遠隔共起」を記述するための枠組みの確立が可能となった。

[2] 接続表現の「遠隔共起」に基づいて、論説文において、どのような接続表現の「遠隔共起」があるのかを調査した上で、逆接型の「しかし」と順接型の「そこで」を例として、論説文の文脈展開パターンを解明することによって、談話研究における接続表現の「遠隔共起」の必要性、およびその記述の枠組みの有効性が実証できた。

ただ、本論文は調査した新聞社説は一社のみで、その影響もあること、大量のデータから対象とすることができたデータが少ない下での研究であることから、本論文で得られた知見は限定された結果であることは否めない。また、本論文で提案しているストラテジーについても説明が十分とは言えず、今後の課題となっている。今後、多言語との対照、特に母語の中国語との対照を積極的に進めるようなプロジェクトや、メディア研究にも貢献できるような研究、さらに日本語教育に応用することを望みたい。

2 最終試験

平成27年5月18日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（国際日本研究）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。